日本学士院賞　受賞者

河内良弘（かわち よしひろ）

専攻学科目　東洋史学

生　年　月　昭和　三年　八月

略　　歴　昭和二九年　三月　京都大学文学部史学科卒業

同　三一年　三月　京都大学大学院文学研究科修士課程修了

同　三一年　九月　天理大学おやさと研究所助手

同　三五年　四月　天理大学教養学部専任講師

同　四二年　九月　米国ワシントン大学大学院極東・ロシア研究所留学（昭和四三年八月まで）

同　四三年　四月　天理大学教養学部助教授

同　四八年　四月　天理大学教養学部教授（昭和六〇年三月まで）

同　五三年　九月　米国インディアナ大学ウラル・アルタイ学部交換教授（昭和五四年八月まで）

同　五九年　三月　文学博士

同　六〇年　四月　京都大学文学部教授（平成四年三月まで）

平成　四年　四月　天理大学文学部教授（平成一一年三月まで）

同　九年　三月　京都大学名誉教授

同　一一年　四月　天理大学名誉教授

同　二六年　九月　中国・黒龍江大学満族語言文化研究中心栄誉教授

文学博士河内良弘氏の『滿洲語辭典』に対する授賞審査要旨

滿洲（Manju）族は、一七世紀前半、中国の東北部から中国に進出し、清朝（一六三六―一九一一）を樹立した。滿洲族の言語である滿洲語は、テュルク語、モンゴル語と共にアルタイ語族に属し、モンゴル文字を改良した滿洲文字で綴られる。本書（『滿洲語辭典』松香堂書店、二〇一四年六月、以下、本辞典と称す）は東洋史学を専攻する河内良弘氏が二十余年の歳月をかけて完成した滿洲語の辞典である。

中国に進出した滿洲族はモンゴル、チベット、中央アジア東部をも征服して、大清帝国と呼ばれる強大な国家の支配者となった。この国家は、滿洲族、漢族、モンゴル族等の多くの民族から成る、モンゴル帝国的な多民族国家であり、同時に、行政・文化等の面では中国の伝統を継承した中国的専制国家であった。その意味で、この国家は内陸アジア史と中国史という二つの枠組みから総合的に考察すべき重要な研究対象である。

大清帝国内では支配者の言語である滿洲語が第一公用語として使用された。ただし、多民族国家であるため、漢語、モンゴル語も滿洲語に次ぐ公用語として併用された。ほぼ一九七〇年代までの清代史の研究は主に清代に漢語で書かれた編纂史料を利用して行われてきた。しかし一九八〇年代以降、従来、その存在すらほとんど知られていなかった、清代に滿文で記された公文書類（「清代滿文檔案」Manchu-Language Archives of Qing Dynasty）、すなわち清代に関する第一次史料が相次いで整理・公開されると、その価値と重要性についての認識が徐々に深まった。そして現在、研究者の間では、これらの、政治、経済、外交、軍事等、多岐にわたる二百万冊以上と推定される膨大な数の滿文檔案の研究を抜きにしては、大清帝国の万全な研究は不可能であるという動かしがたい認識が共有されている。これらの貴重な滿文史料を利用するには、当然、充実した滿洲語の辞典が必要にして不可欠である。

従来、滿文史料を読むための辞典としては、羽田　亨（編）『滿和辭典』（京都帝國大學滿蒙調査會、一九三七年、復刻、国書刊行会、一九七二年）が使用されてきた。ただしこの辞典は用例を欠くほか、誤記、誤植が多く、また、檔案に見える滿洲語の語彙などを収録していなかった。

本辞典の著者河内氏は、清代の滿洲族の前身である明代の女真（Jusen）族の歴史学的研究などで優れた業績を上げ、滿文檔案の公

開後は、その文献学的研究を積極的に進めてきた。さらに一九八〇年代の末からは『満和辞典』に代わる良質の満洲語辞典の編纂を志し、長年の刻苦精励の末に、同氏の創意・工夫を反映する以下の特徴を備えた本辞典を完成した。

本辞典の第一の特徴は、まず見出し語の日本語訳が『御製増訂清文鑑』（満洲語の意味を満洲語で説明し、さらに漢語訳を加えた清代官撰の満＝満＝漢辞典）に見える満洲語の説明を利用して作成されている点である。すなわち日本語訳が信頼できる出典・根拠を持つという点である。さらに本辞典には『御製増訂清文鑑』に見える語彙のほかに、『清文総彙』『大清全書』など清代に編纂された五種類の満＝漢辞典に見える語彙をすべて採録し、かつ、それぞれの語彙の出典を、その出現場所（巻数・丁数など）と共に明示している点である。すなわち本辞典には、確実な出典に依拠し、さらに依拠した出典を明示するという、いわば徹底的な「出典主義」が貫かれており、これが本辞典に他の満洲語辞典には見られない科学的な客観性を与えている。

第二の特徴は、『満文老檔』『満文太宗実録』などの、主として歴史関係の満文檔案から多数の語彙、用例を採録している点である。河内氏は巨冊『中国第一歴史档案館蔵　内国史院満文档案訳註　崇徳二・三年分』（松香堂書店、二〇一〇年）等の著者であり、同氏の檔案についての造詣がよく反映された本辞典は、特に歴史関係の檔案を利用する研究者にとって極めて有用な研究工具となっている。

第三の特徴は、本辞典が漢語を解する海外の満洲学の研究者にとっても、利用しやすい最良・最新の辞典となっている点である。近年、海外でも、胡増益主編『新満漢大詞典』（新疆人民出版社、一九九四年）、朴相圭編『新満洲語大辞典』（集文堂、ソウル、二〇一二年）、Jerry Norman, *A Comprehensive Manchu-English Dictionary*, Harvard University Press, Cambridge (Mass.) and London, 2013 などの満洲語辞典が刊行されている。しかしそれぞれに欠点があり、語彙、用例など多くの面で、本辞典はそれらを大きく凌駕している。たとえば河内氏が、本辞典の海外における利用を予期して、本辞典所収のすべての満洲語語彙に清代に付けられた漢語訳を漏らさず付している点も注目すべきである。

河内氏は、本辞典の編纂中に、文法のほか読本篇をも含む、世界で唯一ともいうべき本格的な文法書である『満洲語文語文典』（京都大学学術出版会、一九九六年）を刊行し、さらに清瀬義三郎則府氏らの助力をも得て、その改訂新版である『満洲語文語入門』（同、二〇〇二年）を出版した。すなわち河内氏は本辞典の完成によって、文法、読本、辞典という、満文史料読解に不可欠のいわば三点セットをほとんど独力で完成するという偉業を達成したのである。

河内氏は本辞典の刊行等により、中国の黒龍江大学満族語言文化研究中心から栄誉教授の称号を受けている。同氏の業績に対する国際的な高い評価が知られるであろう。また、同氏は本年度中に本辞典を基礎に『満洲語辞典　索引編』をも刊行予定と聞く。その出版によって、本辞典の利用価値はさらに一層高まることであろう。

河内氏の本辞典は日本の東洋学界が生んだ傑出した研究成果の一つとして、今後長く世界の満洲学の研究者によって使用され続け、斯学の発展に大きく貢献することは必定と思われる。

以上のごとく、本辞典は、日本学士院賞の授賞に値するものとして高く評価できる。

主要な業績

著書

『明代女真史の研究』同朋舎、一九九二年八月。

中国語訳：趙令志・史可非　（訳）『明代女真史研究』遼寧民族出版社、二〇一五年三月。

『満洲語文語文典』京都大学学術出版会、一九九六年二月。

『満洲語文語入門』（清瀬義三郎則府と共著）京都大学学術出版会、二〇〇二年六月。

『中国第一歴史档案館蔵　内国史院満文档案訳註　崇徳二・三年分』松香堂書店、二〇一〇年一月。

『満洲語辞典』（本田道夫技術協力）松香堂書店、二〇一四年六月。

編著・論文

（助編）田村実造（編）『明代満蒙史料』満洲篇六巻・蒙古篇一〇巻、京都大学文学部、一九五四年三月－一九五九年三月。

（助編）田村実造、今西春秋、佐藤　長（編）『五體清文鑑譯解』下巻　漢字索引、京都大学文学部内陸アジア研究所、一九六八年一月。

『日本における東北アジア研究論文目録　一八九五～一九六八』天理時報社、一九七二年三月。

中国語訳：河内良弘編、趙阿平・楊惠濱訳編「日本関于東北亜研究成果選編－関于満学研究論文目録　（一八九五－一九六八）（一）」『満語研究』二〇〇〇－一、黒龍江省満語研究所、二〇〇〇年六月；「同」（二）『満語研究』二〇〇〇－二、二〇〇〇年一二月；「同」（三）『満語研究』二〇〇一－一、二〇〇一年六月。

「烏桓・鮮卑伝訳注」『騎馬民族史（一）』平凡社東洋文庫、一九七一年一二月。

「金王朝の成立とその国家構造」『岩波講座世界歴史』九、一九七五年二月。

「明代遼陽の東寧衛について」『東洋史研究』四四－四、一九八六年三月。中国語訳：楊暘訳「関于明代遼陽的東寧衛」『黒河学刊』一九八八－三、一九八八－四、黒河市社会科学学会聯合会、一九八八年九月、一二月。

「ニシャン・サマン傳譯注」『京都大学文学部研究紀要』二六、一九八七年三月。

「崇徳二年正月分満文檔案譯註」『京都大学文学部研究紀要』二八、一九八九年三月。

（編）『清朝治下の民族問題と国際関係』平成二年度科学研究費補助金総合研究A　研究成果報告書、一九九一年三月。

「満漢合璧雍正朝奏摺譯注」『京都大学文学部研究紀要』三一、一九九二年三月。